

やまと 民俗への招待

4月21日、大和郡山市中心街から南約2キロにある番条の集落を訪れた。

この日は年に一度の「お大師さん」の日で、南北に長い80戸ほどの各家が、普段は仮壇などにおまつりしてある弘法大師の像を、厨子とともに家の入り口の門屋などに飾って拝めるようとする。集落の北の方から始まり、南端の家が八十八番札所になり、この日番条の集落を一回りすれば、四国遍路をしたことに

4月21日、大和郡山市年にコレラが流行し、以来弘法大師信仰が始まるといわれる。タケノコや高野豆腐、ご飯などの御膳と色とりどりの花が供えられ、華やかだ。今年はあいにくの雨模様で、いつもより人は少ないものの、夫婦連れや女性同士のグループが巡っている。四国八十八カ所靈場会公認先達の山下正樹さんら10人ほどの遍路姿のグループも見かけた。



民家にまつられた大師像を拝む巡礼の男性
=大和郡山市番条町で、筆者提供

庶民が守った霊場

県内には大安寺(奈良市)から始まって盆地を中心とする大和八十八カ所など広域の寺々を

札所にして巡る例や、矢田寺(大和郡山市)の裏山を巡る矢田山四国のように寺の傍らに設けられる場合もある。また宇陀市の平井大師山のように集落の近くの山に設けた例や、大師山のように集落内の大師山のようになる場合もある。番条のように集落内の家が日を決めて札所になる場合もある。1901(明治34)年につけられた高山新八十八カ所(生駒市)は番条と同様で、私の曾祖父の家も札所に加わって

いた。県内各地に大小の「大和の四国」がつくられ信仰されていたのだ。遠隔の靈場には簡単には参れなかつた昔、身近な生活圏に巡回札所を設けた。これを「写し靈場」と呼ぶ。西国三十三カ所や大峯信仰などでも行われていていた。

大和の民俗は、こうして外部の信仰文化も積極的に取り入れて形作られてきた。

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)

1830 (文政13)